

# 子規の書簡

—その病歴と文学活動を中心として

黒  
沢  
勉

子規は膨大な分量の書簡を書いた人である。その友人であった漱石も多くのすぐれた書簡を書いた人として知られているが、子規の書簡はそれを質、量共にしのぐものだと私は思う。子規の書簡には温かい人情があり、ユーモアがあり、人間感情の率直な表現がある。そのあるものは文学であり、書簡文学として第三者が読んでも深い感銘を覚える。のみならず、その随筆や評論も書簡としての性格をもっていることも注目されてよい。「歌よみに与ふる書」は文字通り書簡のスタイルで書かれている（「書」は「書簡」という意味である）し、晩年の随筆も読者に対する私信としての性格ももち、読者からの便りに応えるという形で書かれている部分もある。子規は書簡を書くのが好きであり、それによる交際を求め続けた人である。簡単に会うことのできる人、ふだん会っている人にも書簡を出していることもある。書簡は、文学的交流の証であり、それ自体「文学」だったからである。講談社版の子規全集全二十二巻のうち計二巻が書簡である。ちなみにその全体を紹介しておく、俳句が計三巻、俳論、俳話が計二巻、短歌・歌会稿一卷、歌論・選歌一卷、漢詩・新体詩一卷、初期文集一卷、随筆計三巻、小説・紀行一卷、評論・日記一卷、俳句会稿一卷、俳句撰集一卷、俳諧研究一卷、研究編者一卷、草稿ノート一卷、年譜・資料一卷である。これを見ると三十五才に満たない短い人生の中での、実に多彩な活動ぶりがしのばれるのだが、書簡の多さも目につくところである。それは子規の社交的な文人意識の反映であるが、同時に子規が病弱であったことも背景にある。健康で多忙な人、実際の活動に忙しい人は一般にあまり手紙を書かないし、書くだけの時間的余裕もないであろう。それに対し病者は外に出て活動できない。容易に人に会うこともできない。病気のために様々な不安、苦しみを味わわねばならない。病気のために無為につれづれの時間を強いられる…。これら病気のマイナスの諸条件が子規をしてあれ程の書簡を書かせたとも言える。書簡を書くことは病者子規のあみ出した一工夫であり、書いているうちに、その苦しみもいつのまにか喜びや笑い、「文学的な」悲しみ―表現という創造活動に転じ

ていくこともあった。そこでは、肉体の苦しみは動物的な叫び、呻きではなく、美の表現に転じ、人々の心を打つのである。子規の書簡は、病気をどう受け止め、どう生きたかの貴重な証言であり、病者の文学がいかにして成熟していったかを証すものである。以下、結核の発病から脊椎カリエスによる臥褥の生活の始まりに至るまで、書生時代から「日本」新聞記者、そして明治三十一年の「ほととぎす」東京移転に至るまでの生き方を幾分の解説を加えながら書簡によって紹介してみたい。

(なお、以下の引用文は旧漢字を新字体に改めた他はすべて原文のままとし、読みやすくするためにルビを施した。又、意味についても括弧内に幾分説明しておいた)

#### ①肺結核の発病―「子規」の誕生

咳・痰・胸痛・咯血・発熱が肺結核の五大呼吸症状といわれるが、初期のうちは症状も軽く、それと気づかないことも多いという。子規が咯血をみたのは二十一才の時であった。即ち、明治二十一年八月の夏期休暇中、佐々田八次郎に四五日の鎌倉江ノ島の小旅行を誘われ、蒸気船で浦賀に行き、横須賀、金沢を経て鎌倉に行くが、暴風雨にあい、冬のような寒さを味わう。この時「一塊の鮮血」を吐いたので、佐々田がどうしたのか、と尋ねると「如何にもあらず、余は度々咽喉をいためて血を出すこと多ければ大方その類ならんといふ内、再び一塊の血を吐きたりしが、そのみにてなんのこともなし、果して咽頭なりしか何処なりしか保証の限りにあらず」と「筆まかせ」所収の「鎌倉行」と題する紀行文に記している。幸い、この時は軽い出血があっただけで、寝込むこともなく、さほど気にもせずそのまま終わった。

しかし、翌二十二年の五月九日夜、突然の咯血があり、翌日又続けて咯血した。そこで山崎元修医師（＝当時、本郷真砂町に開業していた医師で医学校―帝国大学医科大学の前身―の第一回卒業生だった）の診察を受けたとこ

ろ「肺焮衝」と診断される。「肺焮衝」とは今でいう肺炎であるが、これは次の項で紹介する漱石の書簡でいう通り、山崎医師の「不注意」あるいは配慮から出た病名で、実際には肺結核であったと考えられる。子規自身もそのことを不安と共に自覚していかねばならなかった。当時、肺結核は死につながる最も身近な国民病として恐れられていたからである。十八才の時から俳句を作り始めており、二十才で松山の俳人、大原其戎を訪問、その主宰誌「真砂の志良辺」に投句するなどしていた子規は、この時「時鳥」という題で四、五十句も作句したという。（「時鳥」は子規・不如帰・杜鵑などと同様「ほととぎす」と読む）。

次の書簡は明治二十二年五月十日常磐会寄宿舎（＝松山藩藩士の子弟のために明治二十年に開設された寮。舎室十二、定員三十名で子規は明治二十一年から二十四年十二月迄、この寮に入っていた）の初代の監督であった服部喜陳に宛てたもので、この時、喜陳は病氣のために監督を内藤鳴雪に引きついで松山に帰省することになっていた。書簡はその別れを惜しむもので手渡しで贈ったという。

「我師とも父ともたのミぬる服部うし（＝「大人」の意で、江戸時代、国学者が自分の先生を指した称。先生）の都を去りて遠き故郷へ帰らるゝと聞きて、いとゞ別れのつらき折から如何にしけん、昨夜より血を咯くことおびただしければ、ひとしほたのみ少なき心地して  
ほととぎすともに聞かんと契りけり血に啼く別れせんと知らねば

歌は、ほととぎすを共に聞こうと約束したのに残念なことです。そのほととぎすではありませんがほととぎす病——結核になって、血を咯いて泣くような悲しい別れなどするとは思ひもかけませんでしたから、ということ苦笑を交えつつ喜陳との別れを、あるいは死につながるものと考え、不安におびえている姿が伺われる。

喜陳は子規のこの歌に返歌をしたらしく「血に啼くときけばいよいよ聞かまほし声なたてそおもふものから」

(あなたが喀血したと聞けばますます共に聞きたいと思われるほととぎすの声です。もちろん、あなたに声をたててほしくない―喀血などしてほしくない―と思つてはおりますが) などといった書き入れが子規からの書簡になされてる。

この書簡を送つた翌日、子規は松山の叔父、大原恒徳に、自分の病氣を知らせる。次の書簡は、明治二十二年五月十一日付のもので、医師に診てもらつてお金もかかったことから経済的な援助を求めたものである。

「扱私一昨夜以来吐血致候処右ハ全く肺焮衝の由 しかし数日にして全癒するとの診断ゆえ御心配被下間敷候 今ニシテ早ク防がずんバ不都合の由に御坐候 別に苦痛もなく格別の事ハ無之候へども若シ他方よりこの事御伝聞に相成候ハハ御氣遣いも有之んかと思ひ一寸申上置候 くれくれも御心配被下間敷候 右の肺が悪きゆえ何をするも左手を使ふは眞の杞憂(無用の心配)にして苦痛之わけには無之候 (略) 病氣の事母上はしめ他の方々へは可成御話無之様奉 祈 候 都合つき候ハハ金少々御送被下 度 奉 願 候 私卯歳なれば卯の花にも縁あり 従而啼血するといふ杜宇にも廻り親類に相成候もおかし

卯の花をめぐけてきたかほととぎす

小家父上抔に肺病のすじ有之候哉 御報奉願候」

この書簡の中で、自分は卯歳生まれなので卯の花と縁のあるほととぎす―ほととぎす病になつたのも、おかしく感ぜられると戯れ、茶化して死につながる深刻な病いを軽く遊びの対象としている。又、「卯の花をめぐけてきたかほととぎす」という句は、卯の花めがけほととぎすが来るように―卯年生まれの自分だから結核が襲つたのだらうかということ、苦いユーモアが感じられる。

同じ口から血をはくにしても一般に「吐血」は消化管からの出血をいい、「喀血(咯血)」は肺気管支粘膜など

から、咳と共に、咳くことをいうが、子規はこの書簡の中で「吐血」という言葉を使っている。又文中に「啼血」という言葉も見えるが「啼」は鳥や獣、又人が「なく」という意味で、「啼血」は「血をはいてなく」ということから、ほととぎすの鳴き声の悲痛なさまを喩えたものである。白居易の「琵琶行」に「杜鵑啼血猿哀鳴」（杜鵑は血に啼き猿は哀しく鳴く）という一節がある。この「啼血」のイメージからやがて「子規」と号するようになる。それは「常規」という本名にも通うからである。

## ②友情の発見

困難に直面した時の友こそ真の友だ、という。单身、東京に出て一人で暮らしている子規にとって、友の助けほど有難いものはなかったであろう。子規の青春は多くの交友に恵まれ幸せなものだった。すでに松山中学時代から同級生と回覧雑誌を作り、グループ活動として文学活動を展開していた子規は、常磐会でも内藤鳴雪、竹村鍛達と「言志会」を結成（明治二十二年）、翌年には舎生の五百木瓢亭、河東銓、新海非風などと「紅葉会」を起こし回覧誌「つれづれの錦」を発行している。寮生達は同じ故郷の同志として共に将来への夢、野心を抱く青年達であり、身近に親もいないわけであるから、病気の時など互いに助けあうことが多かった。子規も同郷の友人清水則遠のりとおが急逝した時、その葬儀委員長をつとめたりしている。（則遠は松山中学の一年後輩で、大学予備門で共に学び、同じ家に下宿していた仲であったが脚気衝心のため十八歳の若さで亡くなった。）こうした同郷の友人の他に、故郷を異にする友人もしだいにできていた。中でも漱石との友情は、その後の人生にまで影響を及ぼす、重い意味を持つものだった。子規と漱石は、同じ慶応三年の生まれで、明治二十一年九月（当時は欧米の大学に倣って九月入学であった）第一高等学校本科で同じクラスになり、寄席好きという共通の趣味がきっかけとなり急速に親交を深めていく。次の書簡は、前述した明治二十二年五月十日の発病時に、子規に宛てたものである。漱石はこの時友人数名

を伴つて病床の子規を見舞い、さらに、医師の所に行つて子規の病氣について尋ねている。

「今日は大勢罷出失礼仕候 然ば其砌り帰途山崎元修方へ立寄り大兄御病症並びに療養方等委曲質問仕候処同氏は乍在宅取込有之由にて不得面会乍不本意取次を以て相尋ね申候処存外の軽症にて別段入院等にも及ぶ間敷由に御座候得共風邪の爲めに百病を引き起すと一般にて咯血より肺労又は結核の如き劇症に変ぜずとも申し難く只今は極めて大事の場合故出来丈の御養生は專一と存奉候 小生の考へにては山崎の如き不注意不親切なる医師は断然廢し幸ひ第一医院（＝帝国大学構内にあつた医科大学付属病院。第二病院は速成医養成のための臨床講義を目的として神田和泉町に設置されていた）も近傍に有之候得ば一応同院に申込み医師の診断を受け入院の御用意、有之度去すれば看護療養万事行き届き十日にて全快する処は五日にて本復致す道理かと存候 且つ少しにても肺患に罹ル『プロバビリチー（＝可能性）』『アル以上は二豎の膏肓に入らざる前に（＝治療の施しようがないほど病氣が重くなる前に）英断決行有之度生あれば死あるは古来の定則に候得共喜生悲死もまた自然の情に御座候 春夏四時の循環は誰も知る事ながら夏は熱を感じ冬は寒を覚ゆるも亦人間の免かるる能はざるところに御座候得ば小にしては御母堂のため大にしては国家のため自愛せられん事こそ望ましく存候 雨フラザルニ牖戸ヲ綯 繆ス（＝雨が降っていないのに窓や戸を補修して、雨風を防ぐ用意をする）トハ古人の名言に候へば平生の客氣（＝血氣。勇み立つて物事をしようとする意氣）を一掃して御分別有之度此段願上候

to live is the sole end of man!（＝生きる（は）ことこそ人の唯一つの目的）

五月十三日

帰ろふと泣かずに笑へ時鳥

聞かふとて誰も待たぬに時鳥

正岡大人 梧右（〓机下。手紙の宛名のわきに添えて敬意を表す言葉）

何れ二三日中に御見舞申上べく又本日米山（〓米山保三郎）、龍口（〓龍口了信。共に第一高等中学校の同級生）の両名も山崎方へ同行し呉れたり

僕の家兄（〓夏目和三郎直矩）も今日吐血して病床にあり 斯く時鳥が多くてはさすがに風流の某（〓私、自分）も閉口の外なし 呵々（〓「あはは」と大声で笑うことを意味する漢語表現で、冗談めいたことを書いた時、照れ隠しのようにこれを添えた）」

この書簡によると、漱石は咯血した子規を同級生達と見舞った後、その病状を案じ、病院に行った。その時の印象で医師を変えるように助言、近くは母のため、そして又国家のためにも健康に留意してほしい、と述べている。

「平生の客氣」というのは、日頃の子規の無謀とも思える自負、氣負いを戒めたものである。「帰ろふと泣かずに笑へ時鳥」という句は、おそらく子規を見舞った時、咯血したので一晩にこんなに俳句が生まれたと、子規が冗談まじりに紹介したものを受けて作ったと思われる。子規はこの咯血のため少し氣弱になって、故郷に帰るなどと言ったので、そんな泣きごとをいわず、笑ってがんばろう、と励ましたものである。子規の心は青年らしい客氣と病氣からくる不安、弱氣の間で揺れていたに違いない。「聞かふとて誰も待たぬに時鳥」は、友人の思いがけない咯血に驚き、案じる気持ちを述べたものである。漱石の兄も同じころ咯血しており、結核が当時、青年達を悩ます、よくみられる病氣だったことも伺われる。また、その結核を「時鳥」という伝統的な詩歌の世界―風流につながるものと捉え、いくら風流好きの自分でもこんなに結核が多くてはと苦笑いをもらしている。

子規は漱石のこの書簡を読みおおいに慰められたに違いない。「筆まかせ」という初期随筆に「病氣見舞」と題



する文章（明治二十三年）があるが、その中で、自分が病気だと聞いて多くの友人が続々と見舞いにかけてくれた、それ迄、あの人は嫌いだ、この人とは交際すまいなどと思っていたのは、病気になった今考えてみると間違っていたと述べている。子規はややもすれば理論的な判断、特有の批判精神から傲慢になりがちな点もあったが、病氣を通して、友情一人情というものに深く打たれ謙虚になっていったのではあるまいか。カリエスに倒れる身となつて以降の子規の、友を求め姿の原型を、この二十二才の咯血体験にみることもできよう。

### ③ 脳と肺—栄養のある食物を求める

二十二才で咯血、「肺病」との診断はあったものの、その後小康状態が続いた。この間、子規は明治二十三年第一高等中学を卒業、九月には文科大学哲学科に入学、二十四年、哲学科から国文学に転科、小説「月の都」を執筆、小説家をめざすようになる。二十四年は「肺病」ではなく、「脳病」に苦しめられた時期である。大原恒徳宛書簡に「私ハ此頃甚だげんきにて外の人が羨ミ居候次第第二御座候」（二月十二日）と書くほどだったが、それから一月もたたないうちに「私も前月末頃脳病（憂鬱病ノ類）ニ羅リ学科も何も手につかず候 十日の閑を偷んで（尤学校ハ大方休ミ也）房総地方へ行脚と出掛申候 萱笠すげがさに日を避け蓑に雨を凌ぎて旅行致候処意外ニ興多く去ル二日帰郷仕候ひしが病氣も大分宜敷様に感申候」（四月六日）と書いている。ノイローゼに陥つたために、旅に出て気分を晴らしたものである。痛みはないが「狂に近きことあり」というのだから、深刻な鬱状態にあったと思われる。旅行あるいは転地療養は子規の病氣対策であり、それはそのまま、風流の世界に遊ぶことでもあった。

病氣対策としてもう一つ、子規が考えていたのは栄養をとる、ということである。明治二十四年四月二十八日、大原恒徳宛書簡で次のように書いている。「私先頃中存外丈夫ニテ人も称し自分も相許し候処十日程已然より何となく不穩之兆候を顕し候 病氣ハ脳と肺と同時に来リタルものに候へともどちらも固ヨリ病いといふべき程にハ至

らず候 畢竟スルニ其原因ハ身体の衰弱ニアル事ナレハト思ヒ先日ヨリ急ニ養生ヲはじめ申候 養生ト申ても牛乳を吞ミ鶏卵ヲ食スル位ニテ鰻店、肉店、西洋料理<sup>など</sup>ハ先日ヤット一度<sup>ひとわん</sup>腕相のそき候へども、是等ハ到底一月一度位之割合ニ非レバ行く能ハざるハ当然に付、致し方もなし」

この書簡では脳病、肺病共にその原因は「身体の衰弱」にあるとし、滋養のある食品を食べるよう心がけているが、貧しいため思うような贅沢もできないと愚痴をこぼしている。経済的な援助を求める甘えもここには感じられないが、子規の唯物的なもの考え方―結核だけでなく、ノイローゼでも、身体衰弱に原因ありとし、栄養のあるものを食べてこれを治そうというのは、少し単純ともいえようが―も伺われて興味深い。「仰臥漫録」にみられる「御馳走主義」は、この頃から病氣対策として子規の実践していたことだった。「脳病」はこの年六月末にも再発、学年試験を放棄して木曾旅行、そのまま松山へと帰郷している。

「脳病」のことでは後輩を心配させたこともあったらしく、明治二十五年五月十六日の、河東碧梧桐宛書簡の中で「小生脳病に付ていたく御心配かけ相すまざる儀にて御座候 小生脳病とハ申ながら朝に晩に痛い痛いもつすほうと申方の痛にてハ無之只々神経病的の脳病にて候へどもそれも比頃ハ大によりしく候故御安心被<sup>くだされたく</sup>下度候」と書いている。

脳病と肺病ということだと思われられるのは漱石のことである。漱石も脳病と胃病で悩んでいた。しかし、漱石は胃病も精神的なものからくる、と考えその背景に日本の近代化のもたらす歪みを見ていた。これに対し、子規は肺も脳の病氣も身体の衰弱のためだとしている。そして十分な栄養をとることのできない貧しさを問題にしている。又、漱石は修善寺大患を見る限り、胃病で最も苦しんでいる時、精神の高揚を覚え、至福を感じているが、子規も結核の深化と共に脳病の方は自然と片づいてしまったようである。

#### ④ 転地療養

明治二十五年子規は小説「月の都」を執筆して幸田露伴の評を求めた。しかしかんばしい評が得られず、まもなく「僕ハ小説家トナルヲ欲セズ詩人トナランコトヲ欲ス」(五月四日 高浜虚子宛書簡)というように、いよいよ詩人ハ俳人として専念する決意を固める。その最初の現れが「瀨祭書屋俳話」の「日本」への連載であり、「日本」を舞台とする俳句革新運動だった。俳句への熱中から学業を怠るようになり、七月の学年試験に落第し、退学を決意する。この年、俳句・文学に熱中しようとした子規にとって、もはや受け身になって習う必要は感じられなかったであろう。「日本」新聞の記者として生きていける目途もついていた。

九月九日、病状が悪化し母方の従弟藤野古白に次のように書いている。

「扱さて小生二三日前より子規病再発尤軽症故甚だ軽蔑致居候処今以て痰血やまず 今日昨日に比すれば稍やや甚だしきの傾あり為に閉口仕候 尤辺土の事故ゆゑそこらあたりにろくな医者もなく未だ誰の診察も受けず候 風流もやや心細きものと被存候 秋風や覚束なくもほととぎす」  
ろくな医者はいないから誰にも診てもらっていないといい、子規病―風流もやや心細いものだと、強気の中にも不安をにじませている。

家族への気づかいもあつて九月十日、大原恒徳には次のように報じている。

「小生昨朝より少々痰血(尤軽し)之気味あり それさへ少々痰が薄紅になる位にて午前に四五塊を吐く位之事故決して御心配被下間敷様奉願候 又外へも御洩し被下ぬ様奉願候 右故一兩日中奔走を見合せ居候 猶なほ甚だしければ医者にも見せ可申積つり故見せたらバ医師の診断ハ早速御報可申上候へとも格別の事にてハ無御座と存候」

前年五月からつきあいの始まった松山中学の後輩、高浜虚子にも強気のところを示している。九月十一日の書簡に言う。

「小生帰郷後（〓子規はこの年、木曾旅行を経て夏休みに帰郷している）例の始末に付大奔走中之処不図肺患にかかり始めハ押シテ歩行も仕りしが、昨今ハまづまづ臥褥まかりあり罷在候 肺患といひたるハ誇張のミ只痰に多少の血痕を印する位なれハ咽喉だか何だか分り不申候 尤医者にさへ見せぬ位也」

おそらく「肺患」との思いはありながらもそれを否定し、強がりを示している。

当時は結核と診断されても、これといった治療法はなく、せいぜい栄養を充分とり、ゆっくり休養する、転地保養するといった生活上の工夫によって悪化を長引かせるといった方法しかなかった。九月十七日の河東碧梧桐宛の書簡に次のように言う。「小生帰郷後取あえず病氣に相かかり候処今ハまづ本復の体也 ことによれハ本月末か来月始頃転地療養に出掛るかもしれず。尤転地と申ても七日か十日位也 貧も亦苦哉」

金がないので長期間の転地療養は無理だというのである。結果としてこの時、子規は大磯で一週間ほど療養した。その時かかった金は大原恒徳に送金してもらったらしく「大蔵事務（〓送金してくれたことを指す）二付ては種々御面倒相かけ候段恐入候 折角御送致被下候故思召にあまへて当大磯へ出掛申候 此地ハ先生来度々首出し仕候ひし処故何か目さきの変った処と存得共病氣之為にハ松林が宜しと申又余り不自由な処も保養に成間敷と存又々ここに相定申候」（十月三日）と書き送っている。大磯での保養は二十二才の時、大谷是空を見舞ったのを皮切りに（二十二年十一月）幾度か訪れてもいた。

保養とはいっても子規は意気軒昂たるものだった。即ち十月三日の碧梧桐宛書簡に「小生本月初めより当地へ来り贅沢に愉快なる日を送り申候 尤口実ハ療養なれども其実多少の仕事に参り候訳也。仕事といふも自分の仕事ならば内に居て沢山なれど人よりの依頼は内に居てはどうしても出来申さず候 何とならば内に居ては自分の仕事許りに従事致候故也 今一週間程は滞在の積に候」と書いている。保養は口実で実は仕事のためだというのである。

この時の仕事というのは「早稲田文学」に原稿を依頼されていたことを指している。転地療養あるいは病床での生活は子規の文学を支える生活スタイルであった。

⑤病床の介護役―母と妹を迎える

明治二十五年七月、子規は文科大学二年生で落第したのをきっかけとして退学、十一月には母と妹を松山から迎えて同居、十二月、陸羯南の「日本」新聞社の社員となった。気楽な書生の生活から職業人として経済的にも自立し、幼少年期と同じ形とはいえ、家庭をもつたことになる。羯南は叔父加藤拓川の友人であり、上京した時から世話にもなっており、社員となる前に木曾旅行の記事や「瀬祭書屋俳話」を連載して俳句の革新運動を展開していた。文学への決意を固めていた子規にとって、記者となることは経済的な自立につながるのみでなく、同時に文学者として活動する場を与えられたということであった。事実、これ以後の子規の文学活動はこの「日本」新聞を拠点として華々しい展開を見せる。俳句革新も短歌革新も随筆も子規の文学活動は、「ほととぎす」（後述）以上に、この「日本」を舞台としてなされた「日本」派の運動であった。その意味で、羯南、「日本」新聞は文学者子規を支える重要な存在であったが、それはいわば公人、職業人としてであって、私的な生活から見ると、母八重、妹律の役割が大きかった。特にカリエスに倒れて以後の子規は、ほとんど寝たきりの生活であったから、単に看病ということにとどまらず、日常生活のすべて―食事や排便、日常のこまごまとした用足し、子規が思うように文章を読めない時の読みきかせや口述筆記、何から何まで、子規の手となり足となって子規を支えたのは妹の律である。母と妹を招くについては羯南の助言、経済的支援もあった。七月二十二日、大原恒徳宛書簡に次のようにいう。

「陸氏のいふ所ハ『私病身ナレハ家族を呼び寄せて養生の出来る丈力尽すがよかるふ それに付て要する生計費は、

どうか工面の就かぬ事ハない』と箇様に注意致しもらひし候事故此場合に於て移転費さへ出来るならばその説を採  
用せぬハ陸に対しても親切に背く様に存候 又当地生計ハ陸氏が引き受けるといふからハこの人は一言一語の然諾  
(「可否」)をさへ容易にする軽薄之人物ならねバあてにする方が却つてその人を信ずるの厚き所以にして宜敷かる  
べしと存候」

こうして、明治二十五年十一月十三日、母八重と妹律は松山を出発、翌十四日、神戸まで出迎えた子規と合流し、  
京都見物をした後、東京についたのは十七日のことだった。

職業上の基盤も確立、母と妹との同居ということ子規の青春は終わり、「日本」新聞という活躍の舞台も与え  
られて本格的な文学者としての活動が始まる。

#### ⑥病氣と貧しさ

五才にして父を失った子規には終生、貧乏ということがまわりついていたが、病氣はその貧しさに一層拍車を  
かけるものであった。薬その他の医療費はもちろんのこと、滋養のある食べ物を求めるなど、結核を病む子規にと  
って経済的な負担は大きかった。母や妹の世話になるとはいつても、経済的には子規の給与がすべてであり、借家  
暮らしであるから家賃も必要な上に、何より医療費・療養費が大きかった。明治二十六年三月一日、日本新聞社の  
同僚五百木瓢亭(「良三。松山出身」)に次のような書簡を出している。

「愚生病氣ハ例の通り也 昨秋診察を受候と同じ者に候 はじめハ少々に急激に來り候へども全快も亦急激に候ひ  
き 尤もこの度は早速医師(宮本仲)の手に掛り今に服用罷在候 前月は十一日已後全く臥褥仕候故余程勉強ハで  
き申候(医者ニハ内々) 命さへ縮まらぬものならバ一年二一度位ハこんな病氣有之度候 血痕跡を絶ち候後ハ褥  
中に在て愉快ニ堪へざる時<sub>あり</sub>有之候故其よし相話し候へば新海ハ苦笑致居候ひき 併シ後にハ訪問者無き為少々無聊<sub>あり</sub>

を感じ候 此間生憎訪問してくれたる人ハ内藤翁一兩度のミ也 談話さへして居れば余り働かぬ故よけれども人が来ぬ已上ハ写本より外に小生の仕事ハ無之為ニ始終肩のつかへのやむ間ハこれ許りハ閉口仕候 医師ハ小生に勧めて今の内養生して早く跡を絶たずんばゆゆしき大患にも立ち至らんと申候へども金のいること許りにて困居り候 今日之処小生一家の経済ハとても薄給の供給にて立ち難き処なるに国許之方も彼是財政困難之由申来候次第覺えず愚痴をこぼし候様に相成候にても御推察被下度 実ハ病中無聊故書信の往復でも幾度ハ存候得共前月杯ハ十四五日より後ハ一家殆んど空虚にて郵便代に差支候次第 御憐察有之度存候 其故貴兄のミならずども御無沙汰致候」貧乏を嘆き訴えてはいるものの、病氣そのものについてはきわめて楽天的で、来客などもあつて「褥中にありて愉快に堪へざる」ものの、訪問の人がいないと「写本」に専念せざるをえないから肩がつかれるなどときわめてのん気なことを書いている。が、そこには虚勢や強がりもあろう。それについても子規を苦しめたのは病氣そのものばかりではなく、それに伴つて金のないことだった。

この年六月、子規は激しい頭痛、高熱に悩まされて医師を招き、薬を買い求めて服用したところたちまち回復をみる。しかしそれも金のかかることであつた。十三日の大原恒徳宛書簡に次のように記している。

「去ル七日頃より頭痛之氣味八日も同様 外出して帰宅後熱度増進之模様故夜九時頃より臥褥終夜頭痛激烈困難仕候 翌九日も終日終夜頭痛やまず 十日の日にハ最早熱氣可相退あいらぞくべしと存候に中々退かず 夜に入て非常之熱ニ相成

申候 暮方よりハ寸時も氷囊をはなさず万一脳炎にもやと存候まま一刻も打捨ておくべからずとて夜半医師を聘し（Ⅱ招き）候処医師来りて熱の高さといひ胃のわるさといひ容体甚だわろし用心し給へ今夜服薬さなる方よろしとの言により夜半車屋を便にして薬を半里の外に請ひそれを服して忽ち寢入候 翌朝に至りさしもの熱尽く去て平常の如く実ニ不思議ニ存候 此日何の事もなかりしに夜寝られず翌十二日も朝ハ何の事なく午後三時頃より寒氣戦

慄後熱発して夜半に到り候故瘧（おとこり）（二間欠熱の一つで隔日又は毎日一定時間発熱する病氣）と存候 後に医に聞けば初め診察した時ハ脳膜炎か肺炎かチブスかになるべしとて氣遣ひしと也 まだ充分にハ分らねども先づ瘧と定りし様なれハ安心に御座候 今度之病氣程苦しミたる事ハ今迄無御座無候

このごろの天氣とて毎日毎日降りやまぬにラムネとか氷とかのため一日に何度母様を勞せしことかわけもわからし候 急に下女を置くことも出来ず頼まうにも人ハなしほとほと困じ果て申候 今度の病氣も実は前月インフルエンザの余勢去らずして常々鬱々と致し候虚へつけこみ候ものと存候得ば瘧にしても後の弱り強かるべくと存候 御工面の都合により御送金願奉候」

「日本」新聞の給与だけでは生活できなかつた子規は、こうして経済的に窮地に陥るたびに叔父に送金を依頼し、それによって何とか切り抜けていった。叔父とは言え、それはずいぶんと心苦しいことであつたに違いない。

⑦奥羽漫遊——病氣と戦いながら

明治二十六年六月、病氣に苦しんだにもかかわらず、子規は翌月の十九日、東京を發つて東北地方への旅に出かける。帰つたのは八月二十日、約一カ月の長い旅であつた。七月二十一日、旅先から河東碧梧桐に宛てて、次のような書簡を送っている。

「瘧は落ちて身体衰へそこへ少々の氣管支炎に脳まされ候次第に候 最早医師に許されて去十九日東京出立紀行はいつれ新聞に載せ候故それで御覽被下度候（略）小生此度の旅行は地方俳諧師の内を尋ねて旅路のうさをはらす覚悟にて東京宗匠之紹介を受け已に今日迄に二人おとづれ候へとも実以て恐れ入つたる次第にて何とも申様なく前途茫茫最早宗匠訪問をやめんかとも存候程に御座候 俳諧の話しても到底聞分ける事も出来ぬ故つまり何の話もなくありふれた新聞咄どこにても同じ事らしく其癖小生の年若きを見て大に輕蔑しある人は是非幹雄門へはいれと申候



故少々不平に存候処他の奴は頭から取りあはぬ様子も相見え申候　まだ此後どんなやつにあふかもしれずと恐怖之至に候　此熱いのに御行儀に坐りて頭ばかり下げてゐなければならぬといふも面白からぬ事に候　せめてはこれらの人々に内藤翁の熱心の百分の一をわけてやり度候　半神士半行脚の覚悟故気楽なれども面白き事はなく第一名句は一句とても出来ぬに困り候　小生は今日に於て左の一語を明言致し候　名句は菅笠ヲ被り草鞋ヲ着ケテ世ニ生ルルモノナリ

先は大略悪旅店ノ腹立ちまぎれにしるす」

無謀な旅であつたが、子規としては芭蕉にならつたこの旅によつて東北の風光に接し、地方俳諧師を訪ねたかつたのである。すでに前年「懶祭書屋俳話」によつて俳句革新に着手、全国的に知られる存在になりつつあつた子規は、地方の俳人との交流を深めさらに又、俳人としての自己の確立をはかろうとした。ところが、旅先で歓迎されるどころか俳句の話をしても通ぜず、師として迎えられるどころか若いのでかえつて馬鹿にされ、かえつてこちらが腰を低くし窮屈な思いをしなくてはならない。その上これはいつた名句も生まれない。旅は始まつたばかりだつたが、当てがはずれ腹ばかり立つことが多かつた。二十六才の子規は、「日本」新聞によつて有名になつていたとはいへ、みちのくの現実を甘く見ていた。子規の旅は、結局、病氣と戦う苦しい旅になつてしまふ。

八月七日、次のような書簡を大原恒徳に送っている。

「私去る頃申上候通奥羽漫遊に出掛け候へども兎角にはかどりかねやうやう昨夜当地着仕候　これより羽後の象潟を一見致し候上盛岡にいで再び汽車にて帰京するつもりニ御座候　旅行少々病氣にかかり養生旁かたがた　仙台にハ一週間許り滞在仕候　病氣と申しましても別に何病といふでもなく只々身体疲労して、朝も昼も夜も無闇に眠たき許りにて隔日位にハ午睡もいたし大に体力を養ひ候処甚だ健壯に相なり仙台を出て二日許り山路を辿り現に昨日ハ下駄ば

きにて九里之道をありき候へども足こそたるけれからだにハ申し分無御座候 併し途中用心して日中ハ茶屋に休み  
さなくとも二里三里ばかり行けバ必ず一時間許り休息することに定め居候」

これは旅先の羽前（山形県）北村山郡楯岡駅から発せられたもので、病氣と戦いながらの旅であるにもかかわら  
ず、気ばかりは大きく、極めて元気なところを見せている。それでも実際は「はかどりかね」ることの多い、予想  
外に長引いた旅であった。八月十六日、漱石にも書簡を送っている。

「愚生（〓私）財政困難のため真成之行脚と出掛候処炎天熱地の間にむし殺されんづ（〓むし殺されそうな）勢ひ  
にて大いに辟易しこの頃ハ別仕立ての人車（〓人力車）追ひ通しに御座候 風流ハ足のいたきもの紳士ハ尻のいた  
きものに御座候 秋高う象潟晴れて鶴一羽 喘ぎ喘ぎ撫し子の上に倒れけり」

金もあまりないから、文字通りの行脚になることも多く、夏の暑さに苦しみ、人力車を利用することもしばしば  
あった。行脚すると足が痛むが、人力車は座りきりのため、尻が痛くなると冗談をとばしている。「喘ぎ喘ぎ」の  
句には病氣と戦いながら苦しい旅をする子規の姿がしのばれる。子規はこの時、「旅に病んで夢は枯野をかけめぐ  
る」の句を思い浮かべ、芭蕉の姿に自らを重ねていたに違いない。

#### ⑧ 「小日本」の廃刊—小康状態

病氣に苦しみながらのみちのくへの旅であったが、帰京後、子規の容体は安定していった。明治二十六年十一月  
から翌年一月二十二日、二十五回にわたって「日本」新聞に「芭蕉雑談」を連載する。二月、「日本」新聞から独  
立した家庭向けの新聞「小日本」を編集主任として創刊するが、日清戦争による社内の人手不足もあり、七月には  
廃刊となり「日本」に吸収された。そうした挫折はあったものの、体調もよく、経済的にも安定していた。明治二  
十七年七月二十四日、大原恒徳当て書簡の中で、健康な時は金にも恵まれ、病氣の時には金もない時だと冗談を書

いている。

「小日本終に廢刊と相成残念に存候 廢刊後直ちに日本へ移り候に付一身上の繁忙は同じことにて暑中一日の休暇さへなく候へども責任は多少相減じ荷の軽くなりたる心地致し候 近來頑健に赴き候は何よりの仕合せに御座候 健康は兎角金と相伴ひ申候に付き少しにても余計に金を伴ふだけ健康に相成候 病氣の時はいつでも金のなき時に限り候」

こうした健康への自信は、同じ病者に対する励ましともなつてあらわれている。次の書簡は、子規のもとで「小日本」の記者として働いていた石井露月が病氣療養のため、安房国の千倉温泉に滞在している折の明治二十七年九月十日付のものである。

「御病氣兎角御すぐれなされざる由嘸々御困却と存候 御身の上承り御心中察入候 小生亦貧家に生れ殊に身体虚弱なるために常に不自由がちに相暮らし候へども天運の廻り合せよく左迄（||さほど）難儀も致さず 人の金で学問して漸く今日までこぎつけ申候 病体についても一時は自ら神経をいたため候へども大患後は全く相あきらめ候様に相なり候 世界を大観し（||大きな心をもつて見る）心胸を濶くし（||広くし）不屈不撓（||困難にあつてもひるまず、くじけない）の精神を以てどこまでも押着に（||ずうずうしく）世渡りすること肝要と存候 不遇の為に厭世的思想を起し軋軋（||不遇・不運）の間に不幸を歎ずるは悟らんとして未だ悟らざる者と存じ候 世道日に危ふく人事月に非なり（||世間は日々、危うくなり、人間も月々悪くなっていく） 我に於て何かあらん（||しかし、自分にとつてそれが何だというのか―自分は自分の道を行くだけである） 彼は彼也 我は我也 不遇歎ずるを用ゐず不幸愁ふるを要せず磊々落落として（||氣が大きく細かなことにこだわらない） 一世を終ふ（||人生を終える） これわずかに悟る者なり 不遇を不遇とせず不幸を不幸とせず是非を一にし吉凶を等しくして（||幸運にあつても

不運にあつても、幸福にあつても不幸にあつても動じないで変らず）自らこの俗界に立ちて己レノ素志ヲ貫ク者即ち是れ大悟徹底的の人物（「悟りの徹底した人物）以て与に談ずべきもの（「語りあうことのできる人物」と存候」

この書簡は露月を励ますものであると同時に、自らの病気に負けまいとする闘志のにじみ出た力強い文章である。露月もこの書簡を読んで心打たれ「胸の中、何故とは知らずかきむしられるように覚え、ひとり暗然として泣かんと欲したことがある。庭前の虫の声は女々しき自分にも似、ゴウゴウと遠き波の音は己レノ素志ヲ貫クと言はれた子規君の声音とも聞かれるのであった」と記している。

⑨日清戦争従軍記者として―帰国後の危機

みちのくの旅の後、容体の安定した子規は、無謀なことに従軍記者として中国大陆に渡ることを決意する。明治二十七年、日本と清国は朝鮮半島の利権をめぐる戦争が起こっていた。近代日本の最初の戦争であり、やがて日露戦争、満州事変から太平洋戦争へとつながる帝国主義的な侵略戦争の発端ともなるものだが、当時の国民はこれを熱狂的に支持し、反対の声はほとんど聞かれなかった。子規も当時の戦争熱と文学に寄せる熱い思いから従軍して、戦地の模様を見て、これを創作に役立てたいと考えた。もちろん、羯南をはじめ、周辺の人は子規の体を案じ、思いとどまるように説得したが子規は頑として受け入れなかった。

明治二十八年一月九日、大原恒徳に次のような書簡を宛てている。

「私も昨年来病氣知らずに相過候間乍憚はばかりながら 御放慮（「御安心」）被下度候（中略）さて私今度或は新聞記者として従軍いたし候様に相成可申と楽しみ居候 方面は未だ何れとも決定致さず候へども大概大阪師団に附随致すべしと存居候 右につき事誼によりては多少の○御無心申度候（「お金を借りたい」）に付甚だ恐入候へどもその御積りに

て御計画願上置候 (中略) 昨年来雄心勃勃々として (|| さかんにわき起つて) 難禁候ひしかども第一ハ他に寒気を恐れ第二ハ他にも望手有之候ひし故さし控え居候ふ 今日になりてハ最早寒気も知れたものに相成り且つ従軍者ひ底 (|| 底をつく、なくなる) ニ相成候故志願致候」

この書簡に続いてさらに、子規は二月二十五日、「日本」新聞社近くで碧梧桐、虚子と食事をし、従軍に際しての決意を述べた書簡を手渡した。

「征清ノ軍起リテ天下震駭シ旅順威海衛ノ戦捷 (|| 戦勝) ハ神州 (|| 日本) ヲシテ世界ノ最強国タラシメタリ 兵士よ克ク勇ニ民庶克ク順ニ以テ此ニ国光ヲ発揚ス 而シテ戦捷ノ及ブ所徒ニ兵勢益ます 振ヒ愛国心愈いよいよ 固キノミナラズ 殖産富ミ工業起リ学問進ミ美術新ナラントス 吾人文学ニ志ス者亦之ニ適応シ之ヲ発達スルノ準備ナカルベケン ヤ 僕適たまたまさかずき 觚こ ヲ新聞ニ操ル (|| 記者として働いている) 或ハ以て新聞記者トシテ軍ニ従フヲ得ベシ 而シテ若シコノ機ヲ徒過 (|| 見すごす) スルアラシカ懶らん (|| 怠け者) ニ非ザレバ即チ愚ノミ傲ごうニ非ザレバ即チ怯きよう (|| 臆病者) ノミ 是ニ於テ意ヲ決シテ軍ニ従フ」

かくして大陸に赴こうとした時、たまたま広島で主治医の宮本仲に会い、ここでも従軍を諫められたが、子規はそれを無視し、四月十日、宇品を出発、大連港から柳樹屯に上陸、金州城に入った。

しかし、四月十七日、日清講和条約が締結され、子規は戦後の傷跡を見て帰国するにとどまった。「日本」新聞に発表された「陣中日記」に次のように記している。

「我門出は徒軍の装ひ流石に勇ましかりしも帰路は二豎 (|| 病氣) に襲はれてほうほうの体に舟を上りたる見苦しきよ 大砲の音も聞かず弾丸の雨にも逢はず腕に生疵一つの痛みなくしておめおめ帰るを命冥加と言はば言へ故郷に還り着きて握りたる剣もまだ手より離さぬに疊の上に倒れて病魔と死生を争ふ事誰一人其愚を笑はぬものやある」

(明治二十八年七月二十三日)

子規の心に苦い後悔の念が横切つたに違いない。だが皮肉なことに、この「病魔」、「病魔」との戦いこそ子規の文学を円熟させていくものとなった。そのきっかけとして従軍記者としての体験は大きな意味をもっている。

戦争も終わってしまったので子規はやむなく五月十四日、老朽化した待遇の劣悪な佐渡国丸に乗船し帰国の途についた。船内では軍夫がコレラで死亡、国内への感染予防のため船は神戸入港を目前にして一週間も停泊した。子規も咯血はなはだしく、和田岬検疫所を解放されるや、ただちに県立神戸病院に入室する身となった。五月二十三日のことである。

神戸病院入院中、七月六日、五百木瓢亭(「日本」新聞記者だったが医師の資格もあつたことから、この時衛生隊の一員として出征していた)に次のような書簡を出している。

「小生近衛(陸軍の師団)に従い金州迄罷越候へども一の砲声を聴かず五月十日に同所出発帰路二就き十四日大連湾ヨリ乗船十七日船中ニテ咯血ヲ始メ候処何の手当ても不出来且ツ消毒とかコレラ患者とかの騒ぎにて漸くよつや和田岬検疫所を放免させられたるは五月二十三日也 (船をあがりしは同日朝) それより釣台にて直ちに神戸病院に入り今日迄已に四十余日に相成候 今度は前年に比すれば甚だしく咯血 後二十日間に渡り申候 自分はそれ程にもなかりしが傍らの人いたく心配して鳴雪などは最早小生を以て地下の人とせられ候ひしとかあとにて聞き及候 此頃はますます快方に向ひやうやう足を出して座る事と腰かける位の事は出来申候 併しかしまだ一歩も歩け不申候 何しろ此頃は談話が出来出して一番うれしく御座候

只今は母も来たり居り碧桐虚子も看護のため来神(神戸に来た) 致居候 貴兄には早く御目にかかり度病中も常にいつ頃帰郷なるや気にかへ居申候ひし程なれども貴兄の御帰郷頃には退院して松山に配所の月をながむるか須磨

のあたりにふるしぐれをやめづらんそこらは未定に有之申候 右御承知被下度候 若し目出度く広島もの御凱旋の節は日本新聞社迄来着の由御発電（〓電報を打つ）被下度候」

神戸病院には母だけでなく碧梧桐、虚子もかけつけ手厚く看病してくれたが、子規は瓢亭にも会いたいという。病氣の時、子規の人恋しさは一層募ったようである。無事広島についたら知らせしてほしい、そのころ自分は松山で月を眺めているかそれとも須磨で時雨をめめているかわからないが、と風流めかして書いている。

⑩神戸病院から須磨保養院へ―危機からの再生

五月二十三日、神戸病院に入院した子規は、七月二十三日まで二ヶ月をここで過ごした。その間、咳、発熱に苦しみ、しばしば激しい咯血をみる。しかし、持ち前の大食に加え、母八重や碧梧桐、虚子らの看病もあり次第に持ち直していく。この間「病床日記」をつけ「病余漫吟」の編集を考えるが、これは後の「仰臥漫録」の原型となった。

七月十四日、大原恒徳に次のような書簡を送っている。

「私病気段々快方に相成昨今は室の内外の散歩雪隠せっちん（〓トイレ）の往来位は容易に覚え候 今日けふは久しぶりにて髪を斬り髻を剃り心地すがすがしく愉快に存候 医師の許可あらば明日頃より庭内の散歩はじめ度思居候

右の次第故あるいは退院も存外早きかも知れずと楽居候 社よりは当月分日当例の如くよこしくれ候へども（〓給与を送ってくれた）それにては今月末迄は無覚束候 就ては右御心配相煩度よろしく願上たてまつり候 いくら入用なるかは分らねども二十円あらば無論大丈夫に御座候 これは只今入用と申には無之候へども（〓すぐに必要だというわけではないが）あらかじめ申上置候

右の金子きんすあらば在院退院どちらにても今月中には不都合なきつもりなれども退院後の模様はいよいよとは分かり不

申候 いづれ今月中には退院の運に到り可申来月になりて須磨あたりの滞在費に就いては其節御相談可申上候 少  
しよくなればいったん帰郷仕拝顔之上御相談致度存居候」

健康の回復しつつあるのを喜ぶと共に、この時の入院で経済的に苦しくなったことから、援助を求める書簡である。七月二十三日、子規は神戸病院から須磨保養院東舎へ移る。死の危機を乗り越えた子規は、改めて入院中の自分にとって虚子や碧梧桐の存在がどれ程助けになったか、まるで「わが子」に会ったような思いがしたと語る。七月二十七日、内藤鳴雪（＝常磐会寄宿舎の舎監長。子規より二十才年上であったが、子規を尊敬し、俳句の指導を仰いだ）に宛てて次のように書いている。

「小生病患ニ付てハ種々御配慮ニ預り候処漸ク退院の許可を得て当地（＝須磨保養院）ニ来り申し候 自分ハ死ぬると迄も思ハざりしが医者さへ氣遣ひしと聞きてハ今更夢のように覚えて半ハうれしく半は恐ろしくはは老耄人（＝ぼけ老人）の如くつまらぬ事ニ心配致し候やうに相成候

拙句 夏瘦の骨にとどまる命かな

此間の消息は碧梧虚子くハしく承知なれとも其実ハ兩人の思ひ居候よりは更ニ甚だしきもの御座候 碧虚など看護致し呉候後ハ一時間でも人が側らに居らねば心細く覚え候事<sup>しばしば</sup>屢々有之従ひて兩人の顔を見る時は我が子にでも逢ひし時の感なるべしと思ふ様の感起る事有之候 それにくらぶれば入院当時の勇氣ハ我ながらえらきものにて看護一人さへあれば畳の上に死ぬるにハ十分なりと定め虚子の京都より電報せし時すら呼寄せる考ハ毫もなかりし（＝少しもなかった）位ニ御座候 おまけに四畳敷の天地ニ押しこめられてしかも寢床の上を離れ得ず天井をながめて呻吟するそれをさへ船より上りし身ハ極楽かと許り思ひ候 それを思へば今の老耄ハ実ニ恥かしく存候 併シ病気の少しツツよくなると共に勇氣もやうやうに回復し今でハ高浜なくと左迄淋しとも思はぬ様ニ相成候 只勇氣の全然



回復するや否やハ無覚束候 此一点一生の遺憾ニ有之候 今日如き無氣力にては此後たとひ何年生きたりとも何事も出来申間敷候 此点よりいふも長く田舎ニ閑居して遊び居るは却つて悪く矢張 都門に住みてはげしき競争の風に吹きまはさるる方が元氣づくべきやと存候」

生死の危機を脱した安堵感と同時に、これから命を大切にしようとして「老耄人の如く」心配するようになった自分が情ないなどというのは、やはり子規の若さというべきだろう。子規からすれば命こそ一番大事だと用心するのは年寄りじみた臆病さ、命汚なさとして否定されるべきものだった。とはいうものの、入院中は一人で氣丈夫に過ごしていたのに、今この保養院では碧梧桐・虚子という二人の後輩に頼るような氣の弱りようで、淋しさを味わっていた。それでも病氣の回復と共にやがて「勇氣」も回復し始め、「無氣力」のまま長生きしても何もならない、氣力をふり絞って厳しい競争の中に身をさらすべく東京に出ようというのである。

①西芳菲との文通―病床におけるユーモア

明治二十八年七月二十六日、須磨保養院の子規は「日本」新聞の愛読者で、子規の「従軍記事」を愛読していた西芳菲ほうひという人から見舞状を受けとった。芳菲は本名を松二郎といい、東京大学卒業の理学士であるが、狂歌を好み、自ら「芳菲山人」、「芳菲坊」(「芳菲」は「かぐわしい草」の意味だがそれに「放屁」をかけたもの)と号していた。芳菲の書簡には「ほととぎすいく夜心にかけてかたとたつた一声問ふてくれかし」「時鳥須磨の浦ではなけれどもなれをまつ風村雨の空」「敦盛の昔の跡に声かけて鳴くやうしろの山ほととぎす」などという狂歌も添えられていた。七月二十九日、子規はこれに応えて次のような書簡を送る。

「愚生病氣につきわざわざ御慰問に預り難有奉存候 追々快方に赴き候間乍憚御放慮是祈候 御惠投の狂歌時にとりて(「時が時だけに)面白く拝誦致候 つれづれのあまり我もひそみに倣はん(「まねをしよう)などおこがま

しく候へど実は初学のうゐうゐしき処（||未熟な点）幾重にも御引立の程奉願上候

病中

一声は死出の田長か極楽の道はと問へど二の声もなし（||一声は死出の道へと案内するほととぎすの鳴き声であろうか。極楽の道はと尋ねたが、次の声は聞こえなかった）

須磨に病をやしなひて

夏の日のもり塚に涼み居て病氣なほさねばいなじとぞ思ふ（||夏の日暑いさ中、敦盛塚に涼んで、熊谷直実のその「なおざね」ではないが病気を治さないうちは出まいと思うことだ）

病の少しくおこたりそむる（||治り始める）と共に養生もおのづとおろそかに（||いいかげんに）人の忠告も聞捨勝なるこそおぞましけれ（||愚かなことだ）

横にふるかうべの里を立ちいでて又こりずまに鳴くほととぎす（||横にふる頭、その頭ではないが神戸を出て、又こりずに、須磨でほととぎすが鳴くことだ——咯血があったことだ）

此頃の雨天つづきに気もむすばれて（||ふさいで）とけぬ折柄かかる御消息（||御手紙）のうれしく覚えて閑居（||ひまな状態でいること）の心をなんなくさめ侍る

お手紙の狂歌あすかとまつ風に日数ふる村雨の空（||お手紙に添えられた狂歌、その狂歌ではないが今日か明日かと待っているが、手紙は来ず、松風に幾日も雨降り続く村雨の空を眺めていることだ）

須磨保養院に移った子規は次第に元気になって、冗談などいうくらいの余裕も出てくる。七月三十日、同じく清国に出征して無事帰国した「日本」新聞社の五百木瓢亭に宛てて次のように書いている。

「先日無恙御帰国之由恭賀々々大兄もと健康無上之身体ニハあれど一年の艱難といひめつらしく帰国の事なれば一

層御用心之上過食などなされぬ様願上候 尤も大兄ニハ暴飲ノ憂之故一番の仕合ニ候(略) 小生帰国船中ヨリ発病し神戸病院にある事ニヶ月 やうやう少し元氣つきて先日当須磨へ来り申候 今度ハ二度目(ニ二十二才の時の最初の咯血が一度目)といひ発病後手当の行届かざりしといひ一ヶ月仰臥不動の姿勢を保ちしことといひかたかた以て身体ノ衰弱甚だしく物事ニ頓着(ニ氣にかける)したり心配したりする迄ニ老耄致候 三度目は仏の面となるべくと存候故用心專一とへこたれ申候 入院中ハ時々大兄の事をいひ出で例の無邪氣なる哄笑を聴きなば病氣も直ちに癒ゆべしなどと碧梧桐虚子に申居候ひしがやうやう御帰着安心致候 小生も来月上旬ニハ帰郷致可致一ヶ月位ハ滞在之見込ニ有之候」

子規はここで、絶対安静を命じられた危篤状態から脱け出て、三度目に倒れる時は「仏の面」となるかもしれない(死ぬかもしれない)と恐れて、いくじなく「用心」に努めていると冗談を書いている。そして、碧梧桐や虚子に瓢亭の笑い声を聞いたら病氣も治るだろうと語っているというところにも、病氣の中にあつて暗く落ち込まない子規の明るさが伺われる。瓢亭はこの時、松山に帰っていたが、自分(子規)も一度帰郷の予定であること、もし松山で退屈だったら松山中学の教師をしている自分の友人夏目金之助を訪ねよ、というようなこともこの手紙に記されている。

#### ⑫須磨から松山、そして東京へ―病状の変化と文学への情熱

明治二十八年八月二十日、須磨保養院を退院した子規は岡山、広島を経て八月二十五日、故郷の松山に帰り叔父大原恒徳の家に行き、二十七日からは、松山中学の教師をしていた漱石の借家に移る。階下の二間を子規の居室とし、漱石は二階に暮らした。親しい者の気安さで五十一日に及ぶ仮寓であった。この間、柳原極堂が松風会会員の句作指導を頼んだのに端を発し、これ以後しばしば句会、吟行を行うようになる。これは明治三十年一月、松山に

において「ほととぎす」が創刊されるきっかけとなるものだった。

十月二日付の五百木瓢亭宛の書簡にこの頃の生活について次のように記している。

「小生其後追々健全に赴き居候処ふと逆上の結果鼻血と相成り二三日間難儀致候へども四日目よりは全く相やみ其後はただ用心のため臥褥致居候 固より医師兩人に診察為致候 今日は大分よろしき故起きて手紙などしたため候 帰郷の途次は御地（＝瓢亭はこの時、広島にいた）へ立寄可申本月十日頃にも相成可申候 帰郷後先日病氣にかかるとは毎日俳友数人つめかけ運座付合等にて夜半迄相つとめ候 それも逆上の一因なるべく候」

松山に滞在中、すでに子規は歩行困難になり始めていたことは十月二十五日、河東碧梧桐に宛てた次の書簡に伺われる。

「小生も大分よろしくなり候故あつまの秋も恋しく須磨迄出稼候処リウマチス儂麻質斯にや左の骨いたんで歩行困難に相成候 当地にては全く動けぬ程なりしを服薬の効によりて今日は大分心よく相成候 明日は少しは歩き得べきかと樂み居候」

このような状態の中で十月末、子規は奈良、大阪を経て東京への帰途に着く。奈良では「柿食へば鐘が鳴るなり法隆寺」の句を得た。この時の旅については「くだもの」（明治三十四年四月「ホトトギス」と題する文章で次のように回想している。

「明治二十八年神戸の病院を出て須磨や故郷をぶらついた末に、東京へ帰らふとして大坂迄来たのは十月末であつたと思ふ。其時は腰の病のおこり始めた時で少し歩くのに困難を感じた。奈良へ遊ぼうと思ふて、病いを推して出掛けて行た。三日程奈良に滞留の間は幸に病氣も強くならんで余は面白く見る事が出来た。此時は柿が盛になつてをる時で、奈良にも奈良近辺の村にも柿の林が見えて何ともいへない趣であつた」

子規は後にこう記しているが、実はこの旅こそ、子規にとって最後の旅であった。東京に帰るや腰が痛み、立つこともならぬ状態になっていく。明治二十八年十一月二十四日、藤井紫影（＝乙男。東大で国文学を専攻、子規の催す句会にも参加。当時福岡県立修猷館<sup>てん</sup>中学の教師であった）に宛てて次のように書いている。

「小生持病は少し快く先月三十一日やうやう帰郷致候処その後神経痛とか申ものにて足腰たたず今に臥褥致居候殊に数日来感冒の気味にて熱発少シ昨今は書見写字も不叶不自由致候。此夏は神戸か須磨にて御出会可出来やと小生も心待にまち居候ところ行違ひて残念に存候。田舎稼ぎは御つらかるべくと察上候へども貧乏人の病氣したのも随分つらきものに御座候。忽ちにして宿痾療治し尽すべき良法ありとも○（＝お金）<sup>コ</sup>がなければ何にもなり不申候。小生はいよいよやけなり文学と討死の覚悟に御座候」

碧梧桐や紫影に宛てた書簡の中でいう、左の骨の痛み、足腰の立たない原因はリウマチではなく、実は脊椎カリエスであることは翌年三月になって判明した。自らリウマチではないかと書いているものの、「やけ」をおこし「討死の覚悟」をしている子規は、あるいはカリエスかもしれないという不安があったものと思われる。しかし、それを不安として書かず、闘志として意志固めをしていくところに子規の負けん気がある。

明治二十八年十二月十日頃、五百木瓢亭に宛てた次の書簡の中でも、病氣と孤独の意識が逆上の闘志となって燃え上がっているのがわかる。長い書簡であるが子規と弟子達の関係、又死を意識し孤立感を深めていく子規の心境の伺われる重要な文章なのでその大分を引いておきたい。

「小生病氣大分よろしく本月初より出社致し病後といひ多忙の為逆上甚だしく一昨日来半狂の心持にて奔走致候それらのため御返事おくれ申候

ここに一つ御報道致すべき事出来申候。単刀直入にては相わかりかね候に付はじめより叙を遂て（＝順序だてて）

可申上候 小生が貴兄及非風と交際致居り候際貴兄よりも非風の方文学上の才能ありと思ひ居候事は僅かの間に非風は稍其正体を現はしかけ候故貴兄に遠く劣り候は勿論逆もものにはなれずとて一朝見すて申候

それと同じく碧梧虚子の中にも碧梧才能ありと覚えしは真のはじめの事にて小生は以前よりすでに碧梧を捨て申候 併し虚子は何処(までも—原文には落ちてゐる)やりとげ得べきものと鑑定致し又随てやりとげさせんと存居種々に手を尽し申候 小生の身命は明日をものはかられぬもの小生の相続者は虚子と自ら定め置候 しかもこの相続者のたしかなる事は小生自ら人を鑑定することの明を有せり(人を見ぬく賢明さを持つてゐる)と自ら恃み居りし心にて相分り可申小生はどこまでも之を信じ貴兄はじめ誰人も能く之を信じ申され候事と存候 併し人間の知恵ほどはかなきものは無之候 小生は今日只今二人となき一子を失ひ申候 小生をして人を観るの明なからしめたる者は(人を見ぬく賢さが無いと思わせたのは)実にこの一窮措大(貧乏学生) 高浜虚子に有之候 最早小生の事業は小生一代の者に相成候 三十有余年だに保ち得べからざる此一代にて相終り可申候 小生はわずか創業の功を奏したる俳句類題全集と共に其運命の短きを嘆じ申候 小生頭脳中に葬られ卒りし幾多の文学思想は水子ともならで闇から闇へ行き可申候

今さらの操り言は誠に笑種に過ぎざれども鬱はらしに可申上候

小生須磨にありし時もしみじみと忠告する処あり且つ我が相続者は君なりと迄虚子に明言いたし候 虚子もやや決心せしが如く相見申候 小生潜かに喜んで心に文学万歳をとなへぬ 先月帰京してつくづく虚子の挙動を見る又是旧時の阿蒙のみ(昔のままの幼い子供にすぎない) 小生が彼に忠告せし処は学問の二字に外ならず候 学問といふ語が小生の口を出て虚子の耳に入りしこと数百度以上なるべし 須磨にての忠告は実に最後の忠告なりし覚悟也 而して虚子依然たり(しかし、虚子は相変わらざった)小生呆然として詠め居候

頃日（Ⅱ近頃）多忙なり碧梧は入社早々醜聞を流しおまけに無学の評あり 新聞の益にはたゞ小生は独り悶悶たる折柄歓迎会送別会と暇なきを以て自分の仕事は一步も進まず稍氣違ひじみたる折柄最早堪へがたく相成昨夜寒風凜々（Ⅱ寒さがピリつとこたえる）たるをもとせせず虚子を訪ひ候ひしに虚子不在なり 小生の気はいよいよいらたたり（Ⅱいらだつた） 直に手紙を發して今朝来れと命ず 今朝起きて待てども待てども虚子来らず けふはやけになつて分類（Ⅱ俳句分類の仕事）に従事致居候へども虚子の事のみ氣になりて捗取り不申 やがて虚子の来りたるは十一時頃なりしならん それより共に午餐をたうべ（Ⅱ昼食をとり）社（Ⅱ「日本」新聞社）へは不参（Ⅱ欠勤）の趣届置虚子を携へて道灌山に到り申候 小生未だ歩行に馴れず行程十町三四十分を費す やうやうに茶屋に腰かけて手詰の談判をはじめたり

君は学問する氣あり否や

千問万答終に虚子は左の如く言ひきり候

文学者ニナリタキ志望アリ 併シ身後（Ⅱ死後）ノ名誉ハ勿論一生の名誉ダニ望マズ

学問セントハ思ヘリ 併シドウシテモ学問スル氣ニナラズ

人ガ野心名譽ヲ目的ニシテ学問修業等ヲスルモノソレヲ惡シトハ思ハズ 然レドモ自分ハ野心名譽心ヲ起スコトヲ好マズ

つまり一言にしてつづめなば文学者にならんとは思へどもいやでたまらぬ学問までして文学者にならうとまでは思はずとの答なり 小生いふ

ソレナラバ子ト我ト到底其目的ヲ同シウスル能ハザルモノナリ

虚子いふ

厚意ハ謝スル所ナリ 併シ忠告ヲ納レテ之ヲ実行スルダケノ勇氣ナキヲ如何セン

吁命脈は全くここに絶えたり 虚子は小生の相続者にもあらず 小生は自ら許したるが如く虚子の案内者にもあらず

小生の文学は氣息奄々えんえん（||息もたえだえの状態）として命旦夕に迫れり（||死も近い） 今より回顧すれば虚

子は小生を捨てんとしたること度々ありしならんも小生の方にては今日迄虚子を捨つる能はざりき 親は子を愛せ

り子を忠告せり 然れども神の種を受けたる子は世間普通の親の忠告など受くべくもあらず 子は伶俐也（||賢明

である） 親は愚痴也（||愚かである） 小生は簡程にまで愚痴ならんとは自ら知らざりき 小生蕭然しゅうぜんとして（||寂

しく）いふ 忠告ヲ納レズトモ子ハ文学者トナラヌトハ限ラズ 我モ絶交スルトイウニハ非ズ 只普ノ朋友トシテ

交際シ今迄自ラ許シタル忠告ノ權利及ビ義務ヲ放棄スベシ

正直ナル者ハ最後ノ勝ヲ制ス 子ニシテ野心ナクンバ却テ無上ノ榮譽ヲ得ンモ測ラレズ 併シ野心アル者ノ勝ヲ制

スル事少カラヌモ又俗世間ノ常態ナリ 子ニシテ野心ナクンバ零落シテ乞食こじき非人トモナラヌトハ限り難シ

然レドモ是レ不遇ナリ 世間ノ悪キナリ 子ハ悪キニ非ズ子ハ何処迄モ高尚ナリ 我等ノ及ブ所ニ非ズ 我ハ飽ク

迄人物ノ上ニ於テ子ヲ崇拜ス 仮令我ヲシテ無上ノ榮譽ヲ得セシメ子ヲシテ物ノアハレニ零落セシムモ我ハ尚人物

ノ上ニ於テ君ヲ崇拜セン

併シ我ハ文学者タラント欲スルナリ 他日我カ榮譽ヲ得タル時ハ是レ文学者タルヲ得シ時ナラン 其時ニ子ヲシテ

若シ零落シ盡サシメバ胸中ニ如何ノ文学思想アルモ最早世上ノ所謂文学者ニ非ルナリ 此時…此刹那…子ハ人物ノ

上ニ於テ我ヲ笑ハン…我ハ文学ノ上ニ於テ子ヲ冷笑セン

咄談話は途断えたり 夕陽うしろの木の間落ちて遠村模糊うらちの裡に没し去り、只晚鴉の雁群と前後して上野に帰る

あるのみ



一語なくして家に帰る 虚子路より去る さらに遅き歩は更に遅くなりぬ 懐手のままぶらぶらと鶯横町に来る時小生が眼中には一点の涙を浮べぬ 今後虚子は榮ゆるとも衰ふるとも我とは何等の関係もあらず 去れども涙は何を悲んでか浮び出たる 嗚呼正直なる者は涙也 義理づくにて久離きりたりとも繩かけられる子が可愛う

なうて何とせう 虚子はどこ迄も神聖也 此後どこ迄も神聖なるべし 彼は文学者となるには余り神聖過ぎたり 彼は終に文学者の材料となり卒おわんぬ

小生の文学は実を結ばずして草頭の露と消え去らん 虚子は終に小生をして人物の上に崇拜せしむべし 虚子は零落すればする程益神聖に益高尚なるべし 小生は虚子が益高尚に益神聖になるを望むと同時に一点の愁涙は相浮び申候 若し零落して後神聖にも高尚にも無くば虚子は小生をして再び人を見るの明なきを證せしめたるものに可有之候 非風去り碧梧去り虚子亦去る 小生の共に心を談ずるべき者唯貴兄あるのみ 前途は多望なり文学界は混乱せり 源語は読了せしや如何 俳句は出来しや如何 小説は如何 過去は如何 現在は如何 未来は如何 一滴の酒も喉を下らず 一点のえぐほ鑿も之を惜む 今迄も必死なり されども小生は孤立すると同時にいよいよ自立の心強くなれり 死はますます近づきぬ 文学はやうやく佳境に入りぬ 書かんと欲すれば紙盡く 喝ッ

帰国以来半年近く休んでいた子規は再び、東京という一大競争場に出て、「日本」新聞社に勤め始める。胸には文学者たらんとする大きな野心を抱きながら。しかし、同時に自分の命の長くないことをも意識していた子規は、後継者について真剣に考えていた。

文学といえは一般には、孤独な自分独りきりの創作活動と考えるむきもあるうが、松山での少年時代、東京での書生時代と常にグループ活動として文学活動を展開、しかもそのリーダーであった子規にとって、グループを抜きにした活動は考えられぬものだった。この書簡を読むとリーダーとしての子規の意識が明白に読みとれる。それは

不遜とさえ感じられるほどである。子規はまず、非風と瓢亭を比較し、最初非風に文学的才能ありと見ていたが瓢亭に遠く及ばないとわかって見捨てているという。子規と非風、瓢亭の関係についてここで簡単に補足しておく。

非風―新海非風（正行）は明治三年、松山生まれ、子規を尊敬し、やがて常磐会寄宿舎で子規と同居、共に句作に熱中し、又「山吹の一枝」を共同執筆する。これは瓢亭をモデルにした野球小説である。（虚子の「俳諧師」はこの非風をモデルにした小説だといわれる）

瓢亭―五百木良三も同じ明治三年、松山生まれで松山医学校に学び、医術開業試験に合格した後ドイツ語研究のため上京し、明治二十二年、常磐会寄宿舎に入った。常磐会寄宿舎では、この非風に瓢亭、子規の文学交遊を通じて俳句熱が高まってゆくのだが、子規はリーダー的な立場から二人を見て、その資質を考えていたことがわかる。

それと同じように、自分を慕って交友を求めてきた碧梧桐、虚子という二人の松山中学の後輩に対しても、その優劣を把握し、どちらが自分の後継者かを計算している。このあたりは「七変人評論」の中で、子規について「時トシテ権数（＝権謀術数の略）アリ」と評されていたことを思い出させるもので、目ざとく人を見抜き、巧みに家臣を操る武将を思い出させる。しかも頭で計算しているというだけではなく、はっきりと明言し、非風も碧梧桐も自分は見捨てている、と書いている。これは当事者としてはいたたまれない発言であろうが、碧梧桐の場合、子規が虚子の方を高く評価し、愛情を寄せているとわかっていても、子規に対する敬愛の情はその死に至るまで、変わらないものであった。率直でありながら人々から慕われ、尊敬される点に、子規の人徳があったともいえようか。それはこの手紙にも伺われるように、子規は単に冷たく計算する打算の人間ではなく一方では熱い人情に涙ほとばしらせる人間だったからであろう。（これは子規の好物が柿で、柿について「冷腸熱血」と記していることを思い出させるもので、腸を冷やす冷たさをもちながら熱い血が通っているという柿は子規の人間性にも通う）信頼に足るの

は虚子だと見た子規は、道灌山において「手詰めの談判」をもって虚子の文学的野心を確認しようとする。虚子は文学者になる希望はあるが自分はそのような野心・名誉心を起こすことを好まず、好きでない学問までして文学者になろうとは思わない、と答える。子規は虚子の「高尚」さ、「神聖」さを認めつつも、野心がなければ「零落し」「乞食非人」となるかもしれないと怒る。「高浜清の如き誠に立派なる生れつきながら少しも進取の気と申もの無之たまたまこれやらんと決心するも猶其決心は行はれずして止むが如き有様、側の見る目も齒がゆく存候故私力のあらん限の刺激致候へども何の効力も相見不申候」(明治二十九年九月四日付大原恒徳宛書簡)と書くように、子規には虚子が「齒がゆくて」ならなかった。

子規と虚子には文学者となるについて又、その人生観・気質において大きな違いがあった。子規にとって、文学者となるのは世間的な榮譽、名譽心とつながることであった。虚子はこのような世俗的な野心を持たなかったから、子規のこうした考えについていけなかった。子規は、虚子の淡泊な態度に逆上した。弟子に(後輩というより、後継者として意識しているから「弟子」に近い)次々裏切られたというが、公平に見れば、弟子は別に師を裏切ったわけではなく、師自らが勝手に弟子に見切りをつけたり、自分の考えを強引に押しつけようとしているに過ぎない。虚子にとって子規のこのような押しつけはうっとうしいものとも感じられたであろう。このような性急さ、強引さは子規の強気な、指導者的な意識とも関係しているが、短命だという自覚がそれに一層拍車をかけたことは間違いないだろう。「あとどれ程も生きられない。だから今のうちに事業を完成し、後継者も育てておかなくてはならない」という意識が性急な押しつけという形で表われていると考えられるのである。子規はこの書簡を書いていくうちに次第に気持ちが高ぶり、興奮していくが、最後には「自立」の固い決意で結ばれている。書くことによつて、次第に氣力を高めていく筆の魔力ともいえようか。

「裏切られた」という思いを抱いたものの、虚子との関係はこれで断絶したわけではなかった。柳原極堂（＝正之。子規と同じ慶応三年松山に生まれ、松山中学時代に子規との交友が始まり、子規より先に上京、明治十七年ごろ盛んに交友。明治二十二年帰省し「南海新聞」に入社していた）の手によって創刊された「ほととぎす」を東京に移し、一地方俳誌から近代文学史に残る俳誌として育てあげたのは虚子であった。そして又、カリエスによる激痛にさいなまれた子規の病床を看護したのは虚子を中心とするその弟子達だったのである。

### ⑬カリエスの告知

明治二十九年二月になると、子規の腰の痛みはますますひどくなり、完全な臥褥の状態となった。そして三月十七日、リウマチが専門だという医師の診察を受け、病気がリウマチではないと告げられる。ある程度の覚悟はあったとはいえ、それは恐ろしいことだった。リウマチでないというのは、脊椎カリエスになったことを告げられたことに等しいからである。「カリエス」という病名は骨が腐ることに由来することからつけられたものであるが、結核菌は肺から脊椎の骨まで侵しはじめていたのである。子規は背を伸ばして立ち上がることでできない体となっていく。この日、高浜虚子に「小生依然たる腰抜けなり、併し、此四五日元氣太だよろし。痛み少しく減じ候」と書いた後、わざわざ「別紙御一笑に供へ候」として次のように心境を記した。

「貴兄驚き給ふな 僕ハ自ら驚きたり 今日夕暮ゆくりなくも（＝突然）初対面の医師に驚かされぬ 医師ハ言へり此病は儂麻質斯ニあらずと

歩行し得ざることここに五旬、体温高き時は三十九度二上り低き時八三十五度七分に下る 忽ち寒くして粟肌に満ち忽ち熱くして汗胸を濡ふす しかも一日も精神の不愉快を感じたることなし 詩を作り俳句を作るには誠に詭へ向きの病氣なりとて自ら喜びぬ 俳友も時々おとづれてくるるに期せずして小会を開くことさへ少からず きの

ふは朝より絵師、社友、従軍同行者、と漸次におとづれて点燈後鳴雪翁来給ひたり やがて碧梧桐紅緑来りぬ 一会を催して別れたるハ夜半近かりけん誠二面白き一日なり けりけふも歴史談など面白く読み居る最中に医師ハ来りしなり」

負け惜しみの強がりもあるうが、カリエスとわかつても実に意気軒昂たるものである。熱の異常はあったが気分は高昂していた。創作意欲も湧いて俳句のためにはおあつらえむきの病氣だとさえ言う。俳友も次々に訪れるから病氣見舞いは自づと句会の場となる。夜中になってやっと俳友たちも帰るといふ具合で、文学三昧の「面白い一日」を過ごしたと得意げに語っている。病氣への恐れ、不安はもちろんないわけではなかった。だが、子規には覚悟があり、野心があつた。

「儂リウマチス麻質斯にあらぬことは僕も略々ほ仮定し居たり 今更驚くべきわけもなし たとひ地裂け山くだ摧くとも驚かぬ覚悟を極め居たり 今更風声鶴唳かくれい（＝鶴の鳴き声）に驚くべきわけもなし 然れども余は驚きたり 驚きたりとして心臓の鼓動を感ずる迄に驚きたるにはあらず 医師に対していふべき言葉の五秒間おくれたるなり

五秒間の後は平気に復りぬ 医師の帰りたる後十分許り何もせず唯枕に就きぬ 其間何を考へしか一向に記憶せず。只其中に

世間野心多き者多し 然れども余わレ程多きはあらず 世間大望を抱きたるままにて地下に葬らるる者多し されども余レ程の大望を抱きて地下に逝く者ハあらず 余は俳句の上に於てのみ多少野心を漏らしたり されどそれさへも未だ十分ならず 縦し俳句に於て思ふままに望を遂げたりともそれは余の大望の殆んど無窮大なるに比して僅かに零を値するのみ」

死の意識は、よくありがちな生のはかなさとか死の不安、死後の恐怖などといった観念とは結びつかなかった。

それどころかかえってこの現世の夢＝野心、大望を遂げられずして生を終えるのかという悔しさをかき立てるものだった。「癩祭書屋俳話」「俳諧大要」によって俳句の革新運動を全国に展開し「日本派」の統領となった子規は、それだけの仕事をしたから充分などと言えなかった。それどころか俳句など自分の「無窮大」の野心のごくごく一部に過ぎないという。子規は死の近いことを意識する中で虚しくついでいく己れの野心を思わないわけにはいかなかった。自分の数限り無い野心、夢、それは空しい夢のままに終わるのであるか。夢は実現されぬどころか誰にも知られることもなく雲散霧消してしまうのであろうか。それを思えば不思議でもあったが、それ以上に悔しかった。無念だった。子規は続けて記す。

「余の如く大望を抱きて空しく土と化せしもの古来幾人かある。余ハ殆んど之を知らず されバ余今ここに死したりとも誰か余の大望ありしと許りも知り得んや 去りとて未だ遂げざる大望の計画を人に向かって話さば人は呆然として其大なるに驚くにあらざれば輾然てんぜんとして其狂に近きを笑ハん 鵠鴻こうこう（＝大きな鳥）の志は燕雀えんじやく（＝小さな鳥）の知る所にあらず。大鵬たいほう（＝大きな鳥）南を図って徒らに鷓鴣しょうりやう（＝小さな鳥）に笑ハれんのみ 余は終に未遂の大望を他に漏らす能ハざるなり 古人亦斯の如く思ひあきらめしかば其大望ハ後世終に之を知るなきに至りしのみ

といふ瞬間の考のミ僅かに今記憶せり」

誰しも自分の生涯が終わりに近いと自覚した時、自分の夢を思い起こすかもしれない。夢が実現されたかどうかは、安心して死ねるか、悔いなく死ねるか一つの基準ともなるであろう。夢といっても特別偉くなったり、有名になつたり、功績をあげたりすることばかりを人は考えるわけでもない。地道でささやかな仕事をもって満足する人も多いだろう。しかし子規にはあまりに多くの野心―世間的な大望がありすぎた。子規の語る野心はずいぶんお

おげさに感じられるが、そこには野心をとげずに自らの生を終えるのかという悔しさがあつた。死を思い、その悔しさを思うことが、バネとなつて子規の病苦を生き抜く原動力となつた。死の近いことを意識するといつてもたとえば癌のようにあと半年とか一年という病氣と違つていたことは幸ひだつた。おそらくそういう短い余命を告げられたとすれば、以後の子規のあれだけの多産はなかつたであろう。子規はこうして、死の意識をもちながら結果として以後五年の命が授けられ、それこそ与えられた一滴の命の雫まで使い果たすようにして生き続けた。死を意識する中での生への執着、野心の実現めざしての精進が以後の子規の生であり、それは一日一日を徹底して生きることにならなかつた。

明治二十九年九月四日、大原恒徳宛書簡の中で子規は「私此頃ハだんだん身体弱るばかりにて前途の望といふ者殆んど無く候へども去りとして手を扼して（おさえて）死を俟つ程には悟りもせねバ無氣力にもならず。一日生きて居れば必ず一日だけの仕事ハ致居候」と書くように又、「成功すると否とは棺を蓋ふて後定まるものなれども進取の氣力ハ成功に至る第一の楷梯と存候」と書くように、「氣力」をふりしほつて子規は生きていく。「松蘿玉液」以降の子規の多彩な文学活動はこうしたカリエスの病苦と戦いながら「進取の氣力」を燃やし続けていつて生み出されたのである。

#### ⑭ カリエスの手術

臥褥の身となつた子規は翌明治三十年、一層病状が悪化し、外科手術が必要だと言われる。二月十七日、夏目漱石宛書簡の中でその覚悟を次のように書いている。

「腰が又々痛を増した 少し筋肉が腫れた 医者は手を打て病氣ハ今やうやう分つたといった 病氣といふはルチユ一毒類似の者ださうだ それで明後日佐藤三吉に来て見てもらつていよいよ外科的の刃物三昧に及ばなければな

らぬといったら僕も男だから直様入院して切るなら切ってみると尻をまくるつもりに候 尤も切り開いたら血も出ることに存候 膿汁も出ることと存じ候 痛いことも痛いことに存候 切ったために足の病気が直ったらしめこのうさうさ(〓しめた、うまくいった。「しめた」の意を兎を「絞める」にかけていう地口)だけれど少くもびっこになる位のことはあると覚悟してゐる

僕の身はどうから捨てたからだだ 今日迄生きたのでも不思議に思ふてゐる位だ 併し生きてて見れば少しも死にたくはない、死にたくはないけれども到底だめだと思へバ鬼の目に涙の出ることもある、それでも新体詩か何かつくつてゐればただうれしい、死ぬるの生きるのといふはひまな時の事也 此韻はむつかしいが何かいい韻はあるまいかと手製の韻礎を探つてゐる間に生死も浮世も人間も我もない 天下ハ韻ばかりになつてしまつてゐる アア有難い此韻字ハ妙だと探りあてた時のうれしさ」

手術に臨んで強気の姿勢が伺われる。手術は手術として、笑いさえ交えて男らしくそれに立ち向かつていく決意を述べる方で、やはり死を思い、死にたくないと思いつつ涙する。しかしその涙も韻をさぐつていくうちに忘れて喜びとなつてしまう。子規はこの頃、詩集を読むことを好み、自ら新体詩に押韻をつけて詩作、そのために「韻さぐり」と題する表のようなものを作つていた。子規にとつて韻さぐりは―文学は、野心の実現というだけでなく、それ自体病苦を忘れ、喜びの世界に遊ぶ大きな支えだった。

考えてみれば世俗的野心、名誉心だけで文学という創造的な営為がなされるわけではなく、書くことそれ自体の中に喜びがなれば書き続けられるわけもない。当たり前のことではあるが、子規にとつて、病気の苦しみが大きければ大きい程、韻探り―文学も又、大きな慰め、喜びとなつていった。

この時のカリエスの手術は手術といつても根本的に治すというのでなく、対症療法として腰にたまつた膿を穴を



あけて外に出すだけのもので、術後の症状も相変わらずだった。三月二十七日に手術、翌二十八日の虚子宛書簡にいう。

「昨日佐藤国手来り手術を受け申候 碧梧桐をたのミて来てもらひ候 いくら痛くとも明日より外出が出来るならば結構と心待にまち居候処昨夜ハ已に再び腫れ上り 手術も何の役にたたぬやうな感じ致候 尤も佐藤ハ一ヶ月半之後又又腫れ上る故其時再び手術可施由申帰り候ひしが一ヶ月半ハおろか一週間もしたらもとの如くなりさうに候 少くも寝返りだけは自由ならんとたしかめ居候しが右の次第にてそれも叶はず失望致候 小生のこそ誠に病膏肓に入りしものどんな事したるとて直る筈はなけれどそこは凡夫のこと故若しやよくなりはしまいかと思ふことまことに浅ましき限りに候 去年ハ上野の花見をしたが、ことしハそれもむつかしからんか 腹の立つことに候 手術のため（多少熱もあれどそれハ八度一分位）只勞れてきのふもけふも筆取ることなど甚だものうく候話さへものうく候」

これで歩けるようになるならと、期待して受けた手術だったが、術後再び腫れあがり失望する。どんなことをしても治るはずはないとあきらめつつも、それでも凡夫の悲しさでもしかしてと期待をつなぐ、そんな自分の気持ち客観的に子規は見つめている。同書簡には次のような一節もある。

「小生神戸入院以後涙もろく病床にある時も傍らに人なき折ハ時々泪を浮へ申候 古白を想ひ出したる時など多く候 花屋日記（『芭蕉死時の日記』）をよめばいつにても少しハ泣き居候へどもこの度の如く咽のいたくなり候事ハ無之候 小生ハ感情の上にては百年も二百年も生きられるやうに思ひ居候故に病氣のために遠大の事業をやめるもつす申ことハ無之候 併し道理の上よりは明日にも死ぬるかと存候 涙もろきも衰弱の結果にして死期の近づきたるものと断定致候 但いくら道理で断定しても自分ハ明日や明後日にハ迎も死ぬ事杯ハ思ひもよらずと存候」

道理から考えれば、死も近いゆえ「遠大の事業」など追つてもどうしようもないとわかっている。「道理」は客観的で理性的な判断であるのに対し、「感情」は主観的な思いである。自分の死に対して人は客観的になりきれない。強く切迫する感情、主観的な思いを生きる。子規は死を前にして涙もろくなり、ささやかなことにも涙ぐむようになる。その涙―感情の昂りは友を求める人恋しさ、文学への精進へと向けられる力ともなった。子規庵を訪れた門人達も、子規の涙によく接することもあったという。

腰部の切開手術をしたものの、再び腫れあがり四月下旬に再手術を行う。術後、子規は、しばしば虚脱状態に陥った。そのような病状の中で四月十三日より「俳人蕪村」の連載が始められ、十二月二十九日まで十九回にわたって連載される。

五月にはピストル自殺した藤野古白の遺稿を漱石の資金援助によってまとめ「古白遺稿」として刊行した。明治三十年六月十六日、熊本在住の漱石に宛てて次のようにこの頃の苦しみを訴えている。

「先月末四五日間打続き九度已上の熱に苦められ朝も晩も一向下るといふことなければ寝るといふこともなく先づ小生覚えてより是程の苦みなし 今度は大方あの世へ行くことと心待に待居候処本月初より熱は低くなり今では飯がうまくてたまらぬやうに相成候 又暫時は娑婆の厄介物とながらへ申候 併し形勢は次第によろしからず今は衰弱の極に有之候 談話などは出来ず僅かに片言隻語を放ちてさへ苦しきこと多し (中略) 毎日の雨さへうらめしく天気晴て熱低き時は愉快で愉快でたまらぬ程なれどさりとて望も何もなければほんの其日其日の苦楽に心をなやまし申候 誠を申せば死といふことより外に何の望も無之候 生きて居る間に死にたいと思ふ筈はないやうなれど回復の望なくして苦痛をうくる程世に苦しきものは無之候 此世にて添はれぬために情死するも同じことと存候 他より見れば心弱きやうに見ゆべけれど今日苦痛減じて多少の愉快を感ずる時でさへ未来を考えへ見れば再びど

んな苦が来るや分らずと思へば今が今にても死といふことは辞せず候

他人よりいへば我輩のやうな道楽者でも一日も生きのびるやうにとの介抱それを思へばいつも涙の程なれどさりとて思ふ事もできず楽もなくして生きて居るのが手柄でもあるまじく候 一日も早く行くべき処へ行くが自分のため又人のためと存候」

ここには死の安楽を願う気持ちが率直に綴られている。死への憧れは子規にあつて、今のこの苦しみを救ってくれるものとして死以外はない、という事実に發するものである。死にたいと思う一方、苦痛の反動のように、ちょっとしたことが愉快でたまらず、飯がうまくてたまらないと感ぜられる時もあり、人々が親切に介抱してくれることに感謝の涙も流れるが、楽しみなくして生きても何のいきがあるうという。苦の中にあつて楽しみ―生きがいを求めようとする。それは病苦を生きる支えであると共に子規文学の大きなテーマともなつてゆく。

⑮「ほとぎす」の東京移転

二度に及ぶカリエスの手術を受けた明治三十年、子規は「明治二十九年の俳句会」(「日本」新聞の三月二十一日から二十四日にわたつて連載。この中で虚子や碧梧桐の句について紹介している)「俳人蕪村」(「同四月十三日より十二月二十九日まで十九回にわたつて連載)などによつて現代俳句・古典俳句の評論を行ったが、翌三十二年になると、短歌にその矛先を向け、大胆な短歌革新運動に着手する。それは紀貫や古今集を批判し、万葉集や実朝を評価、人間感情の率直な表現、写実に短歌の本質があるとする鮮烈な主張であつたが、子規は単に理論を説くにあきたらず自らの家で歌会を開き、(三月二十五日がその最初の日である)以後多くの歌人達が子規庵を訪れることになつた。四月八日、佐藤紅緑(「弘前出身。日本新聞記者」宛書簡に次のようにいう。

「時勢と運命とハ致し方なきものとするも半分ハ自分のやりやう次第にて善くもなり悪くもなることと存候 殊に

貧乏に生まれたるものハ余計に苦勞せねばくらしさへ困る訳なればつまり我等は貧乏籤を引いたものにて不幸無此上人より余計に働いて僅の給金をもらふも前世の我儘が報い来たものかも知れず候 世の中をうまくわたるといふ人あれどもうまくわたる人ハいつでもしまひに失敗するかと存候 小生ハどこ迄も正直にやるつもりにて馬鹿といはるる覚期に御座候 はじめから辛苦するつもりでやればいつまでも苦辛に堪へ得らるものなれどうまくやるつもりてやりそこなったら多くハ頓挫致候かと存候 小生杯ハ方不幸ばかりうちつづき候故今でハあきらめ居候 此上まだありとあらゆる不幸ハ小生の一身にかかってくるものと常ニ覚期致候 足は二本とも立てぬやうになるべしと存候 月給をもらへぬやうになる時もあるべしと存候 熱があり苦痛烈しき最中でも筆をとらねバ家族がかつゑるといふやうな時も来るべしと存候 かかる空想も小生にありてハ空想にあるまじ 真に来るべきかと存候 併シどこ迄も艱難に負けぬつもりに有之候 小生の身で艱難にまけるやうなら一刻も生きてをられまじくと存候」

病氣や貧乏を自らの宿命と観念し、今以上の不幸、苦しみを予想しつつもそれに負けまいとし、どこまでも正直一方に、やり抜こうという闘志がここにはある。紅緑はこの手紙に深い感銘を受け「此の手紙は余がバイブルである、御経である、論語である、座右の銘である」と記しているが、子規の病状を直接見、知っているだけにその文に賭ける闘魂と執念に深く心打たれたに違いない。

この年七月上旬、柳原極堂の手によって松山で発行されていた俳誌「ほととぎす」を虚子が受けついで発行することとなり、十月十日その第一号が発刊された。子規もこれに「小園の記」などの文章を掲載、子規の作品発表の場は以後「日本」新聞と「ほととぎす」の二つとなつてゆく。

「ほととぎす」の東京移転についてここで少し述べておこう。明治三十一年六月三十日、子規庵を訪ねた極堂に子規は、虚子が東京で俳誌を発行する意図をもっていること、自分もそれに賛成しようとしているというようなこ

とを語り、「ほととぎす」を虚子に譲ってくれと頼んだ。かねてから「ほととぎす」の発行を負担に感じていた極堂はこれを承知する。

極堂ははじめ、松山の松風会の活動が低調になっていったのをきっかけに、「新勢力を糾合して子規の革新事業を後援するに如かず」（「友人子規」）と考え、「勇猛心を振って」「ほととぎす」を創刊したのだった。誌名も、創刊発行日も定めた後、子規に告げ「是が非でも御承認を願はねばならぬ」という必死の決意で、子規もこれには驚いたが同意し、その場に居合わせた人々も原稿の約束をした。

しかし、一年後には極堂自身「遠大なる目的と固なる決心なく、唯一時の意図に駆られし其薄志弱行の結果」と書くように、熱意を失い、子規が逆に何とか「ほととぎす」の発行を続けてくれと頼むような状態になっていたのである。「御申越によれば売先は予州にあらずして他国にある由、是れ最も可賀の事とうれしく存候。則ち予州は極めて僻在の地ながら俳句会の牛耳を取る証拠にして此事を聞已来猶更小生は『ほととぎす』を永続為致度念起り申候」と記すように極堂の「ほととぎす」刊行の時、すでに子規の野心は全国誌にあった。虚子が俳誌を出してみたいと考えたのは、それぞれその性質が異なるとはいえ極堂にとっても子規にとってもこれ程うれしいことはなかったのである。

だが、果たして虚子にそれだけの大事業ができるのだろうか。子規には不安もあった。

明治三十一年七月一日の虚子宛書簡によれば、まず初めに「ほととぎす」の東京での刊行に反対だと子規は語っている。第一、俳句専門の雑誌では五百部がいいところで、とうてい二千部など発行できない。又、虚子に売れるような雑誌を作る才覚がないとも考えていた。この点に関しては自分の方が「小日本」で経験済みで、売れるようにするには、様々に異なった読者の要望に応えるように「議論的攻撃的弁護的」な文章や「教訓的批評的解釈的」

な文章、古俳人の批評や比較、俳人の伝記、あるいは俳諧史などを連載するのがよいと助言、これらの分野は自分の得意とする分野だが、俳句に関しては自分より虚子の方がずっとうまい、その点自分は少し恥ずかしく感じている。俳句が下手なのは病気のためでもあろうが、「それにもかかわらず平気でやっているのは不景気で、若しくじけたらいよいよ墮落するであろうと心配する故だ」と述べている。

虚子が「ほととぎす」を出すについてはまだまだ不安はあるが、「もしやるなら臍を固めてやりたまへ。いよいよやるときまれば小生は刑場に引かるる心持がする。小生ひとり必死でやるのに貴兄が存外冷淡であったり疲労して寝てしまったりせられては困る」と子規は「必死」の覚悟を促している。「事務的の小生は一切雑誌の編纂上の事を担当して詩人的の貴兄等の作を知りして行くという姿になる。よろしい、引受けてやってもみたい」——子規はこうして虚子発刊の「ほととぎす」を全面的に支援する決意を固める。

明治三十一年八月三十一日発行の「ほととぎす」第二十号が松山における最終刊となり、その後東京市神田錦町の発行所に移され、虚子が主幹となる。そこには子規の強力な後押しと並々ならぬ決意があったことは「ほととぎす」発行所を東京に遷すこと」という次の一文にも明らかである。

「余一身を以て言へば病余の廢体立つ能はず行く能はず、一日の安をも得る能はざる境涯に在りて、間を窺ふて書き、苦を忍んで書き、褥に臥して書き、夜を徹して書く、一部の地方的雑誌ほととぎすを書くにすら苦辛いふべからざる者あり。今より後中央雑誌ほととぎすを書くべきを思へば余はそぞろ刑場に引かる、感無きにあらず。然り余はほととぎすと終始せんと欲する者なり。余死すとも固よりほととぎすは死せざるべし、しかもほととぎす死する日は即ち是れ余の死するの日ならざるべからず、ほととぎすは余の生命なり。」

同年九月、石井露月に「ほととぎす」に載せる原稿を依頼したが、その内容が面白くないといって、子規は原稿

を返却する。載せられないわけではないが、自分の「癩癩」——勝手な判断、わがままで出したくない。又、その方が君の名譽を傷つけないだろうと、手厳しいことを書いた上で「今度ホトトギスを東京に移すについては僕は余り進まなかったのだ。併し虚子が是非やるといふから死を決したの。世の中の人は（我々の仲間さへ）此一雑誌を軽く見て居るのだからうけれど、僕は最早ひくことが出来ぬ行掛りになって居るからホトトギスが倒れるやうなら僕は生きていない積りだ」とその並々ならぬ決意を語っている。

「ほととぎす」はその後、子規の予想に反して好評で、大いに売れたが、一方「日本」の方は低調になっていく。「日本」新聞社員として給与を受けていた子規は「ほととぎす」にも多くの作品を発表するようになった。しかし陸羯南はそれに対して何一つ苦情をいかなかった。子規はこのことに深く感謝しており、「僕カライへバ『日本』ハ正妻デ『ホトトギス』ハ権妻（二）（仮の妻）トイフワケデアルノニ、兎角権妻ノ方へ善ク通フトイフ次第ダカラ『日本』へ対シテ面目ガナイ、ソレデ陸氏ノ言ヲ思ヒ出ストイツモ涙ガ出ルノダ。徳ノ上カライフテ此様ナ人ハ余リ類ガナイト思フ」（明治三十三年二月十二日夏目金之助宛）と記している。